

# 檜隈寺瓦窯の調査

—第181-4次

## 1 調査に至る経緯

本調査は、飛鳥藤原第180次調査と同様に、国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所が実施する国営飛鳥歴史公園（キトラ古墳周辺地区）整備工事とともにあって、2008年度からおこなっているものである。今回、檜隈寺に関連するとみられる瓦窯を初めて発見したので報告する。

整備工事では、檜隈寺跡の北側から東側にかけての園路の設置と中水・電気の埋管をおこなう工事の立会（A区）と、檜隈寺跡北西を通り檜前集落に延びる道路に面する斜面の法面整備工事の立会（B区）をおこなったところ（図181）、B区において瓦窯を発見したことから、急遽、飛鳥歴史公園事務所と協議し、発掘調査に切り替えて対応した。

## 2 今回の調査成果

### 調査地の概要

検出した瓦窯は1基で、その位置は檜隈寺（現・於美阿志神社）が立地する丘陵の北西斜面、檜隈寺講堂からおよそ50m北西の地点である（図181）。丘陵頂部は、檜隈寺中心伽藍を除き、後世の農地化の際に広く地形が改変されているが、丘陵斜面際は削平の影響が比較的小なく、瓦窯もこの位置において検出した。瓦窯は東西方向を主軸とし、西側に開口する。窯体の残存長は約2.3m、最大幅は約1.8mである。遺構保存のため窯の掘り下げは南半分にとどめたが、窯は左右対称形と考えられるので以下のような規模・構造に復元できる。

### 瓦窯SY990

**概要** 有畳式平窯で、焼成室全体と燃焼室の半分程度がのこっている。地山を掘り込んだ後に、から焚きをして壁面を焼き固めたとみられ、日干煉瓦や瓦、粘土貼りによる壁体構築はおこなっていない（図182）。

**焼成室** 焼成室は幅約1.8m、奥行約1.4m、最大残存高約0.9mである。残存部分では奥壁は垂直に近く、側壁は上方でわずかに内傾する。床には4条の分畳畠が設かれている。この畠は地山削り出しではなく、窯体掘削

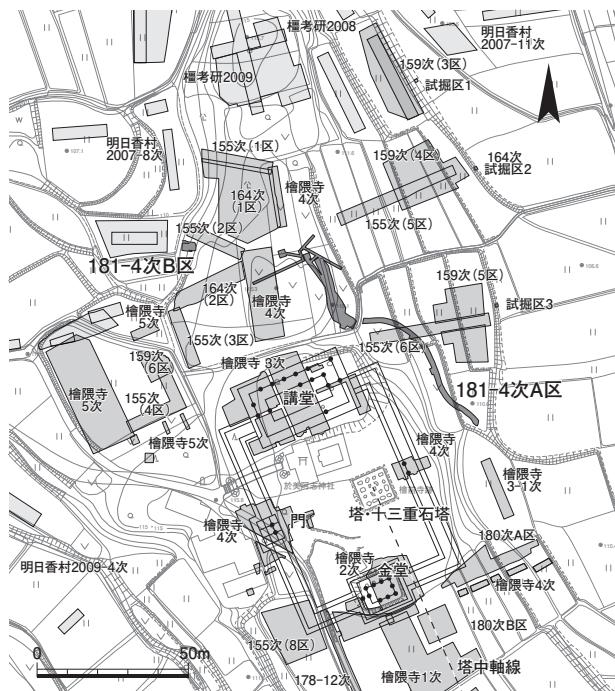


図181 第181-4次調査区位置図

後にスサ入り粘土と瓦を用いて構築されている。構築材には瓦が少なく粘土の割合が多いことが特徴である。分畳畠を横方向に貫通する通畠孔はない。床面は12~13°傾斜しており奥壁側が高い。窯に詰められた状態を保つて出土した瓦はなかった。

**隔壁部** 隔壁は分畠畠とは別づくりで、畠の先端に接続してスサ入り粘土と瓦で構築されている。したがって、4条の分畠畠に対して分畠孔は5つ空いていたことになる。隔壁の大部分は倒壊しており、燃焼室に崩れ落ちた状態で検出した。構築材の瓦には、軒瓦の檜隈寺I型式（7世紀前半）～III型式（7世紀末から8世紀初頭まで：講堂・塔所用）と共に胎土をもつものがある。隔壁部では窯の幅がわずかに狭くなり、くびれる。

**燃焼室** 燃焼室は幅約1.8mで、奥行は約0.9mが残り、焼成室の床面との間に0.3mほどの段差をもつ。燃焼部の側壁は垂直ではなく、残存している部分では下部でわずかに外側に広がり、上部で再び内傾して、丸みを帯びている。焚口側は削平されて残っていない。床面には粘土貼りなどはなく地山のままで平坦であるが、被熱により赤色硬化し、その上には一面に厚さ1~4cmほどの炭層が広がっていた。炭化物は燃料材に由来するとみられる。炭層は1層のみであった（図183）。

**時期** これまでの研究によって、瓦窯はその構造にもとづき緻密な編年が構築されている。特に、焼成室と燃焼室の面積比や、焼成室面積および長幅比、分畠畠の数をてがかりにすることで、瓦窯の時期はかなり細かく